

富山市病院事業のあり方検討協議会  
意見書

令和6年2月

富山市病院事業のあり方検討協議会

## 1 協議会の目的

2040年以降の人口構造の変化を見据え、国は、生産年齢人口の減少に対応するマンパワーの確保、人口減少地域における医療機能の維持・確保や医師の働き方改革に伴う対応、高齢化・人口急減による入院・外来医療ニーズの変化、都市部における医療介護複合ニーズ・看取りニーズの増加などを、医療提供体制をめぐる課題としている。

こうした中、富山市病院事業に対しては、国の主導する「高度急性期・急性期医療から在宅医療」までの医療機能の分化・強化、連携に向けた取組みを、地域に根ざした病院として、確保・下支えすることとともに、新型コロナウイルス感染症をはじめとした、新興感染症に対する平時からの備えや感染症拡大時の対応など、公立（自治体）病院の果たす役割が求められているところである。

しかし、現在の富山市民病院及び富山まちなか病院は、施設や設備の劣化、老朽化が進んでおり、病院事業局として、今後、地域に必要な医療サービスの提供を継続していくためには、抜本的な対策を講じる必要があることから、今後のあり方を検討する必要があった。

そこで、富山市病院事業局では、令和5年7月に医療関係者及び有識者で構成する「富山市病院事業のあり方検討協議会（以下、「協議会」という。）」を設置し、これらの課題解決に向けた検討に着手したところである。

まず、当協議会において検討する課題として、市民病院とまちなか病院を個々に考えるのではなく、地域医療構想で示される今後の医療需要の変化なども見据えながら、両病院の機能や医療連携の姿を実現させるため、建て替えも含めた病床再編を検討する必要があったが、両院を同時に検討し、地域医療構想との関係をも考慮すると、協議会としての意見集約に相当な時間が必要となり、建て替えともなると、検討から開院に至るまでさらに長期間を要することが想定された。その間にも施設等の老朽化がさらに進み、医療サービスの提供にも支障が出ることは避ける必要があったことから、まずは、築59年を経過し、老朽化の著しいまちなか病院に焦点を絞り、検討を行うこととしたところである。

このような方向性を確認した後、令和6年2月までに3回の協議会を開催し、まちなか病院の「担うべき役割」、「望ましい機能」、「今後の施設整備のあり方」について、幅広い議論、提案を行い、検討を重ね、ここに意見書として取りまとめた。

## 2 協議会の実施

### 2-1 協議会の委員

当協議会には、委員として、医療・福祉の専門家、行政の専門家、経済・会計の専門家、住民代表から幅広くご参加頂いた。加えて、オブザーバーとして富山県、富山市の担当部局が参加した。

#### 富山市病院事業のあり方検討協議会 委員一覧（順不同・敬称略）

委員名	備考（所属・役職など）
高村 雅之	金沢大学 医薬保健研究域 教授
林 篤志	富山大学附属病院 院長
稲村 睦子	富山県看護協会 会長
（座長）舟坂 雅春	富山市医師会 会長
長澤 邦男	富山市自治振興連絡協議会 副会長
今本 雅祥	富山市副市長
市森 友明	富山経済同友会幹事
須藤 武志	須藤武志公認会計士事務所
村上 美也子	富山県医師会 会長
高城 繁	富山市社会福祉協議会 会長

#### ・オブザーバー

氏名	備考（所属・役職など）
加納 紅代	富山県厚生部 参事 （医療政策・医療人材確保担当）
清水 裕樹	富山市福祉保健部 部長

## 2-2 協議会の開催

協議会は計3回開催し、この他にも書面によるアンケートを実施し、広く意見を求めた。

令和5年 7月26日	・第1回協議会 趣旨説明、基礎調査の報告、まちなか病院の担う役割、機能についての議論
11月17日	・第2回協議会 第1回の議論を踏まえ、建替えを含めた方向性の確認 意見書の構成等の確認
令和6年 2月16日	・第3回協議会 最終的な意見の集約と意見書の取りまとめ

### 3 富山市病院事業の現状と課題（検討の前提条件）

#### 3-1 富山市病院事業の現状

##### （1）両病院の概要

病院名	富山市民病院	富山まちなか病院
開設日 所在地	昭和 58 年 10 月 【築 40 年】 富山市今泉北部町 2 番地 1	平成 31 年 4 月 【築 59 年】 (旧逋信病院：昭和 39 年) 富山市鹿島町二丁目 2 番 29 号
面積、 構造、 許可病床数	敷地面積 29,229.12 m <sup>2</sup> 延床面積 43,429.91 m <sup>2</sup> 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下 1 階、地上 8 階建 一般 489 床、精神 50 床、 感染症 6 床 計 545 床	敷地面積 4,701.41 m <sup>2</sup> 延床面積 3,833.00 m <sup>2</sup> 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下 1 階、地上 4 階建 一般 50 床
医療機能 及び役割	高度急性期・急性期機能 中核病院	回復期機能（地域包括ケア病床） 後方連携病院
中長期計画 における方 針（連携・ 病床再編）	ダウンサイジングによる 医療資源の集約化	回復期機能の拡充

##### （2）両病院の決算状況及び患者数の推移

（単位：千円、人）

年度		平成 30年度	令和 元年度	2年度	3年度	4年度
収支・患者数						
経常収支(税抜)		△107,892	△632,584	△9,446	△61,241	△121,211
内 訳	市民病院	△107,892	△308,441	183,330	23,521	△44,627
	まちなか病院	—	△324,143	△192,776	△84,762	△76,584
患者数（入院＋外来）		394,624	422,916	333,038	372,915	376,546
内 訳	市民病院	394,624	393,630	302,938	340,650	342,556
	まちなか病院	—	29,286	30,100	32,265	33,990

### 3-2 地域の医療ニーズ等の現状と今後の見通し

富山市都心地区では、開業医の高齢化等により、閉院数が新規開業数を超える状態が近年続いており、同地区におけるかかりつけ医機能、プライマリケアの医療体制の充足が課題となっている。

また、都心地区は高齢者が増える傾向にあり、遠方への通院が困難な患者に対し、外来診療や在宅医療のニーズが高まるものと想定される。

### 3-3 国等の医療政策の動向

#### (1) 国及び県の対応

急速な少子超高齢化の進展に伴う疾病構造の多様化や医療技術の進歩など、医療を取り巻く環境が大きく変化する中で、地域全体で適切な役割分担の下、質が高く、必要な医療を提供するため、都道府県、各公立病院に対して次の要請をしている。

- ・第8次医療計画（2024年～2029年）の策定と併せて、地域医療構想に係る医療機関ごとの対応方針の策定や検証・見直し
- ・各公立病院に対し、2027年度（令和9年度）までを期間とする「公立病院経営強化プラン」の策定（令和5年度までに策定）

#### (2) 市（病院事業局）の対応

- ① 富山県が策定する第8次医療計画の内容も踏まえ、病院事業の公立病院経営強化プランを策定（2022年度～2023年度）
- ② 2019年度策定の「富山市病院事業局中長期計画」（2020年度～2025年度）及び「経営改善計画」（2020年度～2023年度）の着実な推進

## 4 まちなか病院のあり方に対する意見

協議会委員からの主な意見は、次のとおりであった。

### 4-1 まちなか病院の担うべき役割

まちなか病院の担うべき役割として、今後増加する高齢者数に対応するために、かかりつけ機能としての外来機能、サブアキュート、ポストアキュートとしての入院機能へのニーズが高いといえる。市が経営を引き継いだ後の機能に対して評価されていることが明らかとなった。

#### 主な意見

- 昔の逡信病院の時代、その当時は病院機能がはっきりとしない病院だった。それが富山市の病院事業に加わったことで、地域包括ケアという言葉を使っているが、病院機能が非常にはっきりした。
- 富山市の人口減少も当然、将来的に見据えておかななくてはならないが、高齢化だからこそ、まちなか病院の今持っている機能を充実させることが重要である。
- あの規模や機能は今の時代に必要である。市民病院が急性期を担い、亜急性期から回復期にかけてシームレスな医療を提供するためには大切な施設であると認識している。高齢者の急性期医療から回復期医療を事業局全体で完結して、在宅医療に繋げていくという大義がある。
- 逡信病院時代は小さな公的病院的な一面と、開業医が少ない地域において、まちなか地域のかかりつけ医的な面の二面性のある病院であった。まちなか地域は開業医がさらに減少しており、現在開業中の医師も高齢となってきている。今後も受け皿としての役割は大きい。
- 富山市内を見回したときに、公的な亜急性期いわゆるサブアキュート、ポストアキュートの施設が不足していたなか、まちなか病院の功績は大きかった。ましてコロナ禍の3年間、帰りたくても帰れない患者も多かった中で頑張っただらうと思う。
- 訪問看護の面からも、終末期医療において長期間対応しないといけないこともないことから、まちなか病院できちんと対応された後、一定期間在宅で看取りという形に繋げておられるのだと理解している。レスパイトも断られたことはない。市の訪問看護ステーションは、まちなか病院を頼りにしている。患者さんからの声で、高齢者が増えていくなか、この病院があつてこそ、最期はこの病院で診て欲しいという意見も聞いている。

- かかりつけ医機能として、初診時の紹介状が不要という点については、今後、患者さんが高齢化していくなかにおいても良い施設であると感じた。
- 市中心部において民間医療機関が減少傾向にあるとのことであった。人口減少の中、民間医療機関も減少していくという状況にあり、公立病院が医療と介護を繋いでいく役割を果たしていくことはますます重要になると思う。
- 都心地区でも、本格的な人口減少が始まり、開業医がどんどん減っていくことが想定される。一定の入院病床を持った回復期の病院が都心地区にあることは重要だと考える。



## 4-2 まちなか病院における望ましい機能

これまで評価されてきた外来機能、入院機能の継続のほか、リハビリ、訪問診療の充実が望ましいとの意見があった。その一方、入院機能を市民病院に集約も考えられるのではないかと意見も出された。

また、従来の入院、外来機能のみならず、産後ケア、子育て支援、在宅医療の拠点、介護との連携、防災、災害時の拠点等、建て替えを機に必要な機能を検討すべきとの意見も多くあった。

### 主な意見

- 基本的に既存の状況をベースにするという考え方だろうが、ゼロベースで考えるのも一つである。まちなか病院を建て直して、これから先30～40年使っていくとなると、いわゆる都心地区の中心において、生活の根幹たる医療面から、富山市が市民に何を提供すべきなのか、まちなか病院に持たせる機能は何かをこの会で協議する必要がある。
- 回復期病院に位置づけるのであれば、医療と介護をつなぐ場でなければならず、医療だけではいけない。在宅医療も切り離せないことから、在宅医療の拠点として、訪問診療等の機能を持つことも考えてはどうか。
- 今回の震災を経験したことにより、災害対応の視点からあり方を考えても良いだろう。
- また、回復期機能としてのリハビリは重要であり、重点的に行っていくことは必要であると考え。
- まちなか病院が果たしている診療所やかかりつけ医としての機能はもちろんのこと、今後は、回復期や介護分野にも関わっていくのは分かる。ただ、市民病院やまちなか病院は、小さな訪問看護等を支える立場であるし、災害や新たな感染症が発生したときにも、他の基幹病院とともにプラスアルファの機能をもって、全体として考えていただけると良いのではないかと感じた。
- 今後、回復期病床が足りなくなるということもあるが、まずは、そもそも病床を持つべきかを考える必要があるのではないかと。もし、まちなか病院で持たないならば、市民病院へ移すという考え方もある。
- 今、総曲輪レガートスクエアで行っている産後ケア、子育て支援、在宅医療の拠点、医療だけでなく、一部の介護を繋ぐ場、レスパイト、そういったことも含めて、まちなか病院にどのような機能を持たせるべきかを考える必要がある。外来機能だけでやれるならば、それもよいのでは。市民病院に入院機能や地域包括ケア病床を持たせるのも考えられる。あの地に何が必要なのかを考えるべき。
- 特に、産後ケアに取り組む市町村が増えており、需要が多くパンク状態である。その点についても、もし加える余地があれば考えてもらいたい。
- 都心地区の診療所機能、回復期に関する医療機能、この2つは維持しなければいけない。これから医療が発達して、急性期を乗り越える方が増えてくる

と、回復に向けて、どこで医療を受けるべきかが問題となり、市民病院とまちなか病院でメリハリのある医療を提供することが重要となる。

- まちなか病院周辺では人口が増えているが、メンタル的なケアが必要なお年寄りも増えてくるだろう。そういうことも視野に、医療だけではなく、生活支援やメンタルケアなどを総合的に行っていけば、収益性としても良いのではと考える。
- 富山市が選ばれる地方都市になれるかという観点がある。コンパクトシティ政策で、人口集中地域を整備しているなか、まちなか病院も一つの要素となる。その上で、高齢者が増えているなか、予防医療の強化や、人材確保、働きやすい環境として、遠隔診療、オンライン診療の技術の研究・活用も必要となる。
- 都市計画の観点からいうと、まちなかの病院で位置特性が重要である。また、富山市がすすめているコンパクトシティ政策に即したものであるべきで、防災、災害時の観点も必要。病院の医業収支だけにこだわらず、立地特性から、例えば、福祉、文化、情報発信施設等、なんらかの商業施設を加えた複合施設化も考えられるのではないか。
- 護国神社前の一等地で、周辺にマンションもないエリアなので、高層化した複合施設を建てるのは難しいのではないか。もちろん、介護施設等と複合的な施設にする観点は望ましいと考える。
- 必ずしも複合化イコール高層化ではないので、考える余地はあるのではないか。
- 外来はコロナ禍で減っている。10年、20年先を見据えた診療科構成が必要だろう。
- 予防医療の拠点は市として必要。元気な高齢者をつくるために市民病院がどのように貢献できるのか。市民病院で急性期医療をして、まちなか病院ではリハビリのほか、訪問診療部門を充実させる取り組みを強化すべき。
- 富山市は小さな訪問看護ステーションが多く、質が上がりにくいという特性がある。回復期病床が少ないため、循環器疾患や脳卒中の方が、急性期のまま在宅に移行することも多くなっているとの報告もある。しかし、リハビリの専門家がリハビリで開業するのは非常に困難で、活躍の場が限られているのが実情である。その点、訪問看護を持っている病院はそれが強みであり、訪問リハビリも組み合わせられるので、富山市の中で訪問看護の中心になる場所が必要ではないか。
- 医療と介護との連携は随分と進んできていると感じているが、地域の要介護者の生活を見ていると、まだまだ不十分だと思うところもある。公立病院として、介護との連携をさらに充実させるモデル的な役割を担ってもらいたい。
- コロナのように、感染症が今後おこったとき、発熱外来があるができるかといった点も市民に必要なことになる。市として、果たすべき医療を考えて欲しいということと、元気な高齢者がつくれる場所を用意できれば、市の魅力も向上するのではないか。

- 医師の働き方改革、医療の大転換時、超高齢少子化社会にあつて、質を高めた医療を継続しなければいけない。病床数ありきではなく、機能分担と連携をキーワードに考えていく必要がある。
- まちなか病院の方向性を検討していくにあつては、富山市が進めてきている地域包括ケアシステムの中で、その役割を改めて考える必要がある。
- もっとまちなか地域にもってきても良いかもしれない。回復期の治療やリハビリは、もっと楽しく行えたらいいのと思うことがあり、患者のメンタル的なことを考えると、まちなかには富山キラリ等の良い施設があるし、総曲輪中央通りも全天候型でリハビリにも使える。

#### 4-3 まちなか病院の今後の施設整備のあり方

まちなか病院の老朽化が進んでいることもあり、建て替えは必要であろうという意見が多くを占めた。一方で、新たな整備には公費負担が必要となることから、診療科目や病床数、経営の健全化についての住民への説明が重要であるとの意見もあった。

##### 主な意見

- ぜひ、新しい建物を含めて、建設的な計画を立てて欲しい。
- 地域住民の立場では、病院周辺の方は支持しておられると感じられる。利便性もある。しかし、建て替えには、経営状況も大切である。
- まちなか病院は富山市の都心にあることから、都心ではない他の事例との比較は単純にはできない。
- 立地や集約、他の病院でも建替が必要となっていないかということも含め、市民病院とまちなか病院だけで考えるのではなく、もう少し大きな視点から、中長期的に考える工夫が必要ではないか。
- 話を聞く限り、まちなか病院の改築は必要だろうという考えを持った。都心地区の人口は増えてきている。また、高齢の方だけではなく、ファミリー層も多く移り住んできており、この方々もいずれ高齢となることから、人口そのものが急激に中心市街地以外に流れていくということは考えにくい。今後の事を考えると、今の状況を一定程度維持する必要があるだろう。
- いろいろな機能を持たせた場合、現在の敷地に建てられるのかが心配である。そうすると、周辺地域への移転も考えられるが、現在地が一番望ましいのではないかと考える。
- 病床を増やすならば、どのくらいの病床数なのかということも併せて、もちろんハードの整備ということで建設費との兼ね合いもあるだろうが、なるべく早急に議論の方向性を固める努力をする必要がある。
- ここ近年、中心部の病院が建て替えで郊外に移転している。富山市医師会の開業医は減ってはいないが、在宅だけやる医療機関が増えており、まちなかのいわゆるかかりつけ医が減っていくことが懸念される。マンションを中心に人口が増えている中で機能を考えたい。
- 経常収支が赤字という現状において、建て替えるならば、採算性について具体的な展望を示さなければいけない。
- 医業収益を上げるためには、医師を初めとする医療従事者をどのように確保していくのかも考えなければならない。一定程度のリハビリ機能を持たせるならばOT、PTの確保も含め、検討を進める必要がある。

- 民間の医療機関が減少傾向にある中で、公立病院が医療と介護を繋いでいく役割がますます重要になると思う。そういった理由から、経営的に赤字になるのは仕方ないのかもしれないが、市民への説明責任も重要である。
- 地域住民の代表として、まとめてもらった内容は、素晴らしいと思う。新しいまちなか病院には、通院しやすく、親切丁寧な病院であること、また通院、入院されている方にアンケート調査等していただいて、病院の事業に活かしてほしいと考える。
- 老朽化した病院の建て直しについては地域医療全体の機能分化と連携を考えたい。前向きに検討していただきたい。

## 5 まとめ

当協議会では、富山市病院事業の現状と課題について委員が情報を共有しながら、人口減少や少子超高齢化の急速な進展により劇的に変化することが予想される医療情勢の中で、富山市病院事業局、とりわけ富山まちなか病院に求められている役割について、様々な視点から協議を行った。

まず、前提として、医療資源（ヒト・モノ・カネ）の確保が困難となってきた昨今、市民が必要とする医療を将来にわたって継続して提供するためには、他医療機関との連携・役割分担がますます重要となることは明らかであり、そのような状況下で、市民病院及びまちなか病院が、富山医療圏で果たすべき役割を明確にしておくことは非常に重要である。

当協議会では、この前提を確認した後、まちなか病院が担うべき『役割』と求められる『機能』に関する協議を行い、まちなか地域に所在する唯一の公的病院として、持続的に安定した医療を提供する存在であること、地域包括ケアシステムの中で回復期機能を有する医療機関として、今後の医療体制やリハビリ機能、医療と介護との連携などを充実させていく必要があるとともに、令和6年1月に発生した能登半島地震を経験した今、公立（自治体）病院として必要な医療を継続して提供することの必要性についても確認した。

これらの検討を踏まえ、まちなか病院が果たしてきた役割を高く評価するとともに、特に富山市の都心地区におけるその機能及び役割は、富山医療圏を俯瞰的に見ても、患者のニーズを満たすものとして、さらには医療と介護の連携のモデルケースとなることも期待して、今後も中長期的に必要となるであろうと結論付けた。

また、まちなか病院においては、現在、建物の老朽化が深刻な状況にあり、将来的な都心地区の医療ニーズの高まりを補う観点からも、現在地または富山市都心地区での建て替えをはじめとした、新たな医療提供体制の構築に関する検討を早々に進める必要があることも確認した。

しかし、建て替えを実施する場合であっても、医療機能の安定的な提供のためには、効率的な運営による収支改善が不可欠であることは言うまでもなく、市民病院とまちなか病院の両病院が、これまで以上に医療機能を補完・強化するとともに、経営の健全化に取り組んでいくことが重要であることも申し添える。

富山市病院事業局におかれては、この意見書の内容を十分検討・精査され、市民が必要とする安全・安心な医療を将来にわたって安定的に提供する体制を整備し、一層の充実を図られることを期待する。